

## 神のご計画に失敗はある？

ローマ人への手紙9章

January 14 & 15, 2012

“わたしはキリストにあって真実を語る。偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって、わたしにこうあかしをしている。すなわち、わたしに大きな悲しみがあり、わたしの心に絶えざる痛みがある。実際、わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこの身がのろわれて、キリストから離されてもいとわない。彼らはイスラエル人であって、子たる身分を授けられることも、栄光も、もろもろの契約も、律法を授けられることも、礼拝も、数々の約束も彼らのもの、また父祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストもまた彼らから出られたのである。万物の上にあります神は、永遠にほむべきかな、アーメン。” (ローマ人への手紙9章1～5節)

イスラエル人は、救い主一神をこの世につれてくるという恩恵を受けた。

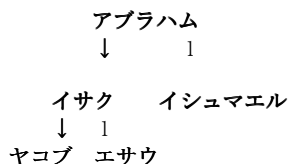
“、、、父祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストもまた彼らから出られたのである。万物の上にあります神は、永遠にほむべきかな、アーメン。” (ローマ人9章5節)

ローマ人への手紙9章における大きな疑問は：  
イスラエル人による、救い主一神に対する拒絶は、  
神の救いのご計画を狂わせたのでしょうか？

疑問#1：神のご計画は、人間の選択に左右されるのでしょうか？

“神の言が無効になったというわけではない。なぜなら、イスラエルから出た者が全部イスラエル人ではなく、また、アブラハムの子孫だからといって、その全部が子であるのではないからである。かえって「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」。すなわち、肉の子がそのまま神の子ではなく、むしろ約束の子が子孫として認められるのである。約束の言葉はこうである。「来年の今ごろ、わたしはまた来る。そして、サラに男子が与えられるであろう」。そればかりではなく、ひとりの人、すなわち、わたしたちの父祖イサクによって受胎したリベカの場合も、また同様である。まだ子供らが生れもせず、善も悪もしない先に、神の選びの計画が、まだ子供らが生れもせず、善も悪もしない先に、神の選びの計画が、「わたしはヤコブを愛しエサウを憎んだ」と書いてあるとおりである。” (ローマ人9章6～13節)

回答#1：神のご計画は、神の選択に伴う。



“エドム人を忌みきらってはならない。あなたの親類だからである。” (申命記23:7)

疑問#2：もし神が、他より、一人の人間を選んだとすれば、不正ではないでしょうか？ (9:14～18)

“では、わたしたちはなんと申すか。神の側に不正があるのか。断じてそうではない。神はモーセに言われた、「わたしは自分のあわれもうとする者をあわれみ、いつくしもうとする者を、いつくしむ」。ゆえに、それは人間の意志や努力によるのではなく、ただ神のあわれみによるのである。聖書はパロにこう言っている、「わたしがあなたを立てたのは、この事のためである。すなわち、あなたによってわたしの力をあらわし、また、わたしの名が全世界に言いひろめられるためである」。だから、神はそのあわれもうと思う者をあわれみ、かたくなにしようと思う者を、かたくなになさるのである。” (9:14～18)

回答#2：神は、神のなさりたい通りになさる。

疑問#3：もし私の決断が、前もって定められているのであれば、どうして神は、私を責めることができるのでしょうか？

“あなたは言うであろう、「なぜ神は、なおも人を責められるのか。だが、神の意図に逆らい得ようか」。ああ人よ。あなたは、神に言い逆らうとは、いったい、何者なのか。造られたものが造った者に向かって、「なぜ、わたしをこのように造ったのか」と言うことがあろうか。陶器を造る者は、同じ土くれから、一つを尊い器に、他を卑しい器に造りあげる権能がないのであろうか。” (ローマ人9章19～21節)

回答#3：神を悪と非難しながら、神を持つことは出来ない。

疑問#4：イスラエル人のイエスに対する拒絶が、神のご計画を進めたとしたら？

“もし、神が怒りをあらわし、かつ、ご自身の力を知らせようと思われつつも、滅びることになっている怒りの器を、大いなる寛容をもって忍ばれたとすればかつ、栄光にあずからせるために、あらかじめ用意されたあわれみの器にご自身の栄光の富を知らせようとしたとすれば、どうであろうか。神は、このあわれみの器として、またわたしたちをも、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召されたのである。” (9:22～24)

回答#4：イスラエル人のイエスに対する拒絶こそが、異邦人へ神の哀れみが大いに注がれるようになるための扉を開けたのです。

この2行に秘める重要な所見：

“神が怒りをあらわし、かつ、ご自身の力を知らせようと思われつつも、滅びることになっている怒りの器を、大いなる寛容をもって忍ばれた。”

“栄光にあずからせるために、あらかじめ用意されたあわれみの器にご自身の栄光の富を知らせようとした。”

1. 神は、滅ぼされるべき怒りの器においても忍耐強いお方である。
2. 滅ぼされるべき怒りの器をも、破壊されるために用意されたのです。
3. 哀れみの器は、あらかじめ神の栄光のために用意されたのです。

旧約聖書は、ユダヤ人の拒絶・異邦人の受け入れを預言しています。

彼がホセア書で言っているように：“あなたがたの兄弟には、「わたしの民」といい、あなた方の姉妹には、「愛される者」と言え。”そして、“『あなたがたは、わたしの民ではない』とわたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる。”

イザヤはイスラエルについて叫んでいる、「たとい、イスラエルの子らの数は、浜の砂のようであっても、救われるのは、残された者だけであろう。主は、御言をきびしくまたすみやかに、地上になしとげられるであろう」。さらに、イザヤは預言した、「もし、万軍の主がわたしたちに子孫を残されなかったなら、わたしたちはソドムのようになり、ゴモラと同じようになったであろう」。(ローマ人 9:25~29)

人間の選択肢(ユダヤ人のイエスに対する拒絶—異邦人のイエスの受け入れ)は、神の救いのご計画を前進するためにただ役立つのみなのです。

人間の自由意志側の等式。。。

では、わたしたちはなんと言おうか。義を追い求めなかった異邦人は、義、すなわち、信仰による義を得た。しかし、義の律法を追い求めていたイスラエルは、その律法に達しなかった。なぜであるか。信仰によらないで、行いによって得られるかのように、追い求めたからである。彼らは、つまずきの石につまずいたのである。「見よ、わたしはシオンに、つまずきの石、さまたげの岩を置く。それにより頼む者は、失望に終ることがない」(ローマ人 9:39~33)

“それにより頼む者は、失望に終ることがない”

ローマ人への手紙 9 章のサマリー

イスラエルは、救世主—神を拒絶した。  
しかしそれが、神が主権を持つ、世に救いをもたらす  
ご計画を前進するために役立つのである。

人間の選択肢は、どうしてか、神が前もって定められた  
ご計画を実行されるために役立つのです。

神の主権と人間の自由意志について最終的な二つの思考：

1. 聖書は、両方の問題点を和解させようとする事無く指し示しています。

“主の名を呼ぶものはみな救われる。主がおおせられたように、シオンの山エルサレムに、のがれる者があるからだ。その生き残った者のうちに、**主が呼ばれる**ものがある。(ヨエル 2 : 23)

2. 私たち限り有る命は、限りない概念を受け入れることを問われているのです。

二律背反：同じ程度に正しいと思われる二つの原理または命題が、互いに食い違って、両立しないこと。

“ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょうか。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りたいことでしょうか。なぜなら、誰が主の御心を知ったのですか。また、誰が主のご計画にあずかったのですか。”(ローマ人 11 章 33~34)

“今、私たちは、鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。”(コリント人への手紙第一 13:12)

\*神の主権と人間の自由意志についての緊迫したディスカッションの詳細は、ウェブサイトの「ローマ人 9 章のコメンタリーでご覧になることが出来ます。